

男鹿から発見されたデスモスチルス(短報)

吉田正逸*

1. はじめに

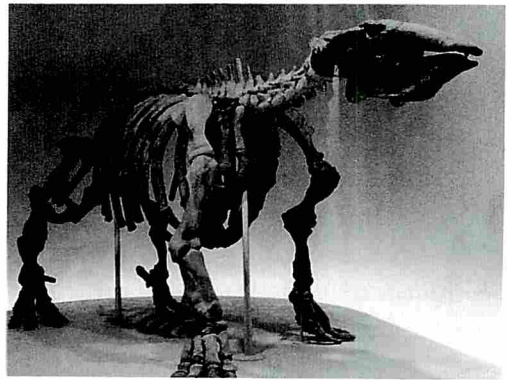
1949年秋田県内では、雄勝郡羽後町で初めてデスモスチルスの臼歯(秋田大学鉱山学部鉱業博物館蔵)が発見されて報告されている。その後、各地の調査が進められたが、デスモスチルスの発見の報告は無かった。しかし、1990年に男鹿市在住の小林一男氏より借用した資料の中にデスモスチルスが含まれていたことで報告することにした。

本報告のため、標本を提供し、現地で調査に協力して頂いた小林一男氏、化石を鑑定して頂いた国立科学博物館の富田幸光博士に深く感謝する次第である。

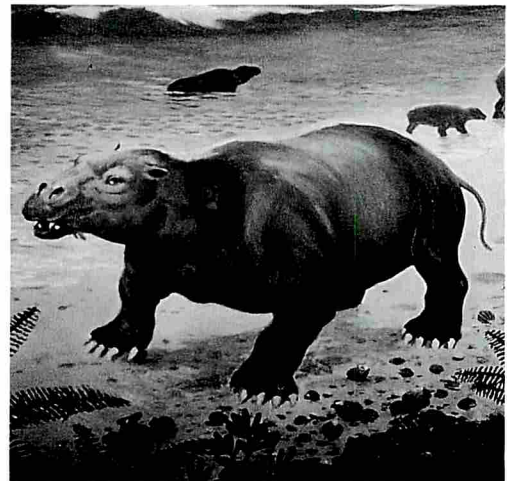
2. デスモスチルスについて

デスモスチルスは、新生代第三紀漸新世後期から中新世にかけての比較的浅い海に堆積した地層から発見されている。その分布は、北太平洋沿岸地域に限られている。デスモスチルスの歯の化石は、1882年にアメリカのカリフォルニアから発見され、その特徴からデスモ(東ねる)チルス(柱)という意味で命名されたものである。1933年には南サハラで全骨格(第1図)が発見された。

デスモスチルスは、丈夫な4本の足を持ち、サイと似ており体長は3m前後、現在のカバや、海牛類や象類に近い(第2図)とされている。口の先に吻(口から先に伸びた管状の構造)を持ち、海岸付近で生活していたと考えられている。分布や生存期間が限られているため、日本を代表する化石の一つとなっている。



第1図 デスモスチルス骨格



第2図 デスモスチルス生活予想図

* 秋田県立博物館

3. 男鹿市で発見されたデスモスチルス

今回報告するデスモスチルスは、小林一男氏が1987年に、男鹿市西黒沢（第3図）で発見したもので、鑑定の結果上顎の一部である。化石はメノウ化しており、保存状態がよい。デスモスチルスの化石は臼歯の発見が多く、その研究がよく進められているが、今回の化石は吻の状態がよく分かる化石となっている。化石の大きさは、次の通りである。

長さ 27.5cm 幅 17.0cm

厚さ 10.0cm（母岩を含む）

6.5cm（骨格のみ）

吻の長さ 25.0cm

吻の太さ 縦 5.6cm 横 4.1cm の楕円形
（先端部 2.0cm の円形）

この化石を含む地層中から *Metasequoia* の実や木片の化石も採集されている。また、この地層と時代を同じとされている地層中から *Gloripallium izuraensis* Masuda や *Astriclypeus manni ambigenus* Nisiyama などの化石が採集されており、時代は初期中新世と考えられる。

4. むすび

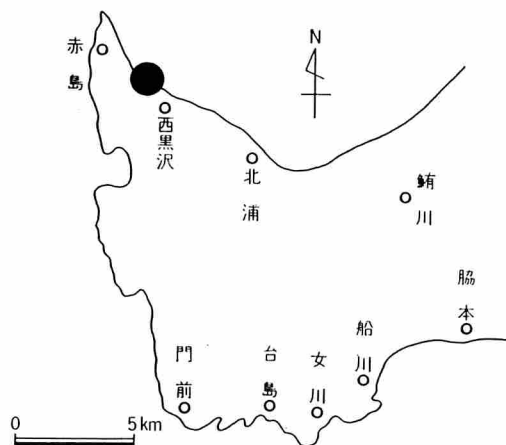
本報告は、提供された化石がデスモスチルスの一部にすぎないため、全体像を把握することはできなかった。しかし、頭部の一部の吻の様子を知ることができた。

なお、同地域から、他の化石も採集されているので、今後も調査を進めたい。

《参考文献》

- 藤岡 一男, 1959; 5万分の1地質図幅「戸賀および船川」, 同説明書
- 藤岡 一男, 1973; 男鹿半島の地質, 日本自然保護協会調査報告, no.44
- 藤岡 一男・大沢稔・高安泰助・池辺穰, 1977; 秋田地域の地質, 地質調査所, 1:50000
- 井尻 正二監修, 1970; 地学教育講座, 地球の歴史と化石, 福村出版
- 木村 達明・猪郷 久義, 1978; 化石の手帖, 講談社
- 日本化石集編集委員会, 1975; 日本化石集, no.67~no.70

第3図 デスモスチルス採集地点略図



《図版の説明》

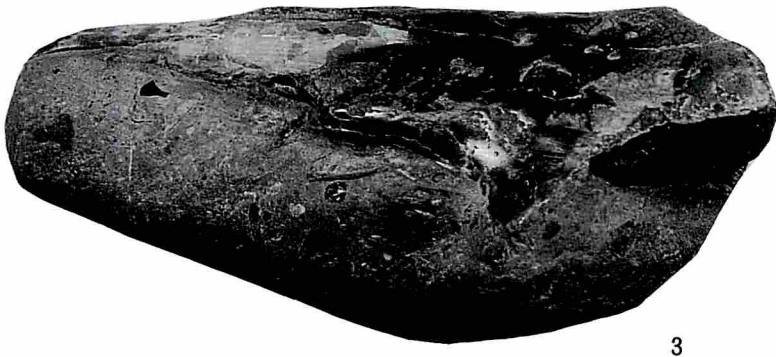
図版 I

1. 上面
2. 右側面
3. 左側面

図版 II

4. 吻の断面
5. 吻の先端

図版Ⅱ



図版 I



4



5